

Title	ポツダム會議の真相について
Sub Title	
Author	田中, 荊三(Tanaka, Keizo)
Publisher	三田史学会
Publication year	1934
Jtitle	史学 Vol.13, No.1 (1934. 4) ,p.119- 137
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19340400-0119

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

ポツダム會議の真相について

田 中 荆 三

前獨逸皇帝ウイルヘルム二世の *Vergleichende Geschichtstabellen* と英吉利の前首相故アスキスの *The Genesis of the War* の二書について比較を試みて見ると、一九一四年七月五日の頃に、兩書の間には相違が発見せられる。即ちウイルヘルム二世の方には『獨逸皇帝はフランツ・ヨーゼフ皇帝の宸翰を受取つた。……獨逸政府は塞耳維との協定をば、獨逸が干渉するを欲しない奥匈國の事柄であると考へた。……』と書いてあり、アスキスの方には『獨逸皇帝はフランツ・ヨーゼフ皇帝の宸翰を受取つた。獨逸皇帝はその返事として、奥匈國の味方になることを保證した。ポツダム會議。』(P. 181)と書いてある。獨逸側に於てはポツダム會議なるものを否定してゐる爲に獨逸皇帝のには記して居らず、英吉利側に於てはこの會議の行はれたことを主張してゐるので、書いてゐるのである。然らば、このポツダム會議は如何なる理由で英吉利側に於ては行はれたことを主張し、獨逸側では否定してゐるか云ふと、之は世界大戦を獨逸が惹起したか、否か、と云ふ戦争責任問題を決定するのに重要な事項となつてゐるからである。

ポツダム會議の真相について(田中)

(二二)

一一九

ヴェルサイユ條約起草の時に於ても、ポツダム會議を獨逸の責任の重要なる證據の一として、戰爭責任委員會より報告されてゐるのである。その報告によると、『ポツダムに於て、一九一四年七月五日に「決定的な相談」がなされ、維納と伯林は「維納政府がベルグラードに極く短い期限を附した、非常に誇張した最後通牒を送らう」と云ふ計畫を決定した』とあり、ポツダムに於ける御前會議によつて世界大戰を決意し、その準備にとりかかり、その後の行動も戰爭になることを意圖してなされたと云ふのである。それで英吉利側に於ては、このポツダム會議の事實をもつて、獨逸が世界大戰を挑發した張本人であるとなし、大戰中に戰爭に疲れた國民を奮起せしめるために、このポツダム會議を利用してゐる。即ち一九一七年七月二十八日のタイムス紙上に、『一九一四年七月五日。ポツダムに於ける重大なる會議。ハーゼの物語。戰爭の起源』なる見出しを附して書いてある。

このポツダムに會議があつたと云ふ話は、既に七月五日の夕方、伯林のある大きなホテルでひどく酔酩した士官がしやべつて居り、それで『ポツダムに於て獨逸の外交官、軍人の會合があり、それに出席したのは、チエゲニイ、ペートマン、ホルヴェーク、チンメルマンで、獨逸皇帝はかくの如き時に北海旅行をするのを好まない』と云ふ噂がたつたのである。然し、この噂はただそれ丈であつて、ポツダム會議なるものが如何なるものであつたかを云つてはゐないのである。

その後、一九一四年九月七日に和蘭の『Nieuwe Rotterdamse Courant』紙上に、ブランケンシユタイ

ン博士がポツダム會議なるものを、九月四日付にて伯林から報告してゐるのである。その内容は『六月二十八日に殺害があり、奥匈國が獨逸に使者を送つたので、七月五日に御前會議が開かれた。そうして、その會議で論じたのは、塞耳維を露西亞が助けたならば、獨逸は奥匈國を助はるかどうかと云ふのであつた。軍人側は奥匈國の擁護者であり、獨逸皇帝並に文官は戰爭を豫想せしめることは反對した。結局塞耳維に對し何かなさねばならないので、その時には獨逸を味方として考へても良いと云ふことになつた。獨逸皇帝と宰相は事がこのやうに大きくなるとは思はなかつた。そうしてこうなつたのは、軍人側が露西亞の軍備が一九一六年に完備するので、その前に叩き潰さんと欲した爲である』と云ふのである。ついで一九一六年一月にヘンドリック・ハドソンがタン紙上に『七月五日に獨逸政府は戰爭の計畫をたてた。ポツダムに御前會議を開き、獨逸皇帝は戰爭の用意を始めたのである』と書いてゐる。

以上二つの話が伯林に於ける噂乃至は話により得られたものである。そうしてこの二つに於ては七月五日にポツダムに御前會議が開かれ、戰爭を決定し、出席したのは獨逸皇帝、宰相等であつたと云ふのである。

所がこの話は一方コンスタンチノーブルに於てなされてゐるのである。それは駐土獨逸大使ワシゲンハイムが亞米利加大使モルゲンタウと伊太利大使ガロニに語つたので、話はこの二人から擴がつたのである。

ワングンハイムは一九一四年七月二日に土耳其の首府をたつて、四日に伯林に着き、同十四日には土耳其に戻つてゐるので、この話の七月五日には伯林に居たことになるのである。それで彼は伯林に居た時の話として、七月十五日にはモルゲンタウに、八月二十六日にはガロニに語つてゐるのである。

ガロニに向つて話したことは、第一に亞米利加大使、ルイズ・アインシュタインの一九一五年六月二十日の日記の中にあり、それによると七月十五日にワングンハイムがガロニに向つて、獨逸皇帝は露西亞の軍備を心配して、大使、實業家、將軍の主なる人達の會議を召集し、戦争を避けがたいものと決し、大公の殺害を口實として、塞耳維の受諾し難いやうな最後通牒を提出し、そうして四十八時間後には宣戦が布告されるであらう、と云つたと云ふのである。

一九一五年九月一日の伊太利外相の記録によると、獨逸は七月に戦争に決してゐたことは疑ひないと云ひ、その最も確實なる證據として七月十五日のワングンハイムの話をおいてゐる。それから一九一五年九月二十六日にナポリに於てサルバトーレ・バールジレイが語つたところによると、やはり塞耳維に通牒を渡す一週間前に、駐土獨逸大使ワングンハイムがガロニに、戦争は避けがたいものであるとしてゐたことである。以上のガロニに向つて語られたと云ふ三つの話はポツダムに於て會議がなされたことは云つてゐないで、獨逸が戦意を七月十五日前に決したことを云つてゐるのである。そうしてなほ一九一七年八月九日のマタン紙上にはバールジレイの話として、ワングンハイムとガロニの間になされた

會話がのつてゐるのである。それには

ワ、私は伯林に行つて來た。いよいよ戦争だ。

ガ、戦争！ それに定つたのか？

ワ、うん、私の出席した皇帝會議に於て定つたのだ。

ガ、塞耳維は讓歩して奥匈國の要求を總てうけいれるであらう。

ワ、それは不可能である。その通牒は受けられないやうに伯林で作るであらう。

ガ、その戦争は世界大戦を意味するのであるか？

ワ、伯林に於て欲してゐるのはそれである。

とあるのである。ガロニについては之丈であり、然してこの會話の如きはフランスに於て宣傳に使つたので、誇張されてゐることは明かである。

一方ワングェンハイムがモルゲンタウに語つたと云はれる話は大分之とは違つてゐるのである。一九一七年八月三日に、モルゲンタウがタイムスの編輯者によせた手紙には、戦争の始まる一月前に、獨逸皇帝は軍隊・財政・工業の主要人物を集めて、戦争の準備が出來てゐるかどうかをきかれ、總てのもの準備が出來てゐると答へ、ワングェンハイムは土耳其のために保證する準備があると答へた、とあるのである。

ついでモルゲンタウが亞米利加の新聞 *World* に一九一七年十月十四日に書いたものには、七月の前半に於て伯林に會議が開かれ、そこで戦争の初の日が定められた。この會議は獨逸皇帝の御前で行はれ、ワンゲンハイム男は土耳其に於けることをきかれた。モルトケは參謀總長として出席し、提督チルピツも又出席し、更に獨逸の財政、鐵道、工業の主要人物が出席し、戦争の準備が出来てゐるかどうかを聞かれた。財界以外の人は肯定し、財界の人は外國の紙幣を賣り、そうして公債を處理するために二週間の時日を要すると云つたとなつてゐる。モルゲンタウは更に一九一八年には *The Worldwork* の五月號六月號に書いてゐる。それには『ワンゲンハイムが七月四日にコンスタンチノープルに居ないことに氣がついた。それは獨逸皇帝が彼を七月五日の御前會議に出席するやうに招いたので居なかつたのである。その會議で歐洲をして戦争さすに決したのである。』とあり、出席者としてはモルトケ、チルピツをあげてゐるのである。

更に一九一八年五月初に出版した *Ambassador Morgenhan's Story* に、

『私は大公殺害後すぐ獨逸大使が伯林に行つたことに氣がついた。今や彼はその突然の出發の理由を明にした。彼は私に云ふのに、獨逸皇帝は御前會議に出るやうに彼をよんだのである。この會議は七月五日にポツダムに於て行はれ、獨逸皇帝も出御し、そうして殆ど重なる大使は出席した。ワンゲンハイム自身は土耳其について保證を要求され、そうして一般のコンスタンチノープルの情勢について、彼の仲

間に明にするために召集された。其所は殆ど起りかかつてある戦争の要點と考へられるのである。この會議に出席した人について語る時にワングェンハイムは名を使つてゐない。けれども彼は特別に彼等の中に——事實重要なので彼の使つた言葉を引用する——*„Die Häupter des Generalstabund der Marine“*が居たと云つた。之によつて彼がモルトケとチルピッツを意味するのであると私は思つた。獨逸の戰備

について軍部と同様に必要な大銀行家、鐵道の監督者、獨逸工業界の主なる人が總て出席した。獨逸皇帝は嚴に、順次總ての人に向つて「貴君は戦争の用意あるか」ときいたとワングェンハイムは私に語つた。財政家を除いては總て「用意してゐる。」と答へた。財政家達は彼等の外國の證券を賣り、公債を處理するに二週間なくてはならぬと云つた。その時にセラエヴォの悲劇によつて戦争が避け難くなると考へたものは殆どなかつた。ワングェンハイムが私に云ふのにこの會議はそのやうな疑の起るのを避けるに總ての注意を拂つた。その會議は銀行家に來るべき戦争に對する彼等の財政を整理する時間を與へることに決した。ある人達は靜に業に就きあるものは休養に出かけた。獨逸皇帝はノルウェーにヨットで出かけ、ベートマンホルヴェークは靜養に出かけ、そうしてワングェンハイムはコンスタンチノーブルに戻つた。

ワングェンハイムはこの會議について私に語り乍ら勿論獨逸が戦争を促したことを認めてゐる。彼は總ての行爲を誇り、獨逸が事件について非常に組織的で豫見的であることを誇り、そうして特に彼がその

やうな劃期的な集合に招待されたことを誇つてゐると私は思つた。私はしばしば何故彼がかやうな重大な祕密を私に明かしたか不思議に思つた。そうして私は多分本當の理由は、彼の皇帝の祕密の會議に彼が如何に接近してゐたかを示したい欲望と、そうして彼がこの衝突をもちきたすに如何なる部分をしめたかを示したい欲望をもつてゐる極端なる虚榮心によるものであると考へる。『P. 84』と記して、なほ諸國の公文書により、自分としてはこの大戰の責任は、一九一四年七月五日のポツダム會議に参加した獨逸皇帝並にその臣下の負ふべきものであると考へると結論してゐるのである。そうして七月五日から二十三日までに、即ち奥匈國が通牒を送るまでに二週間あつたことを指摘して、その間に獨逸が外國の證券を金に變へた爲に、ニューヨークの市場に於て株が如何に下つたかと云ふことを書いて、前に財政家に二週間の暇を與へたことの説明としてゐる。

以上の如き記述に就てレイモンド・ターナーが質問したのに對しモルゲンタウはワングンハイムとの話は昨日話された如くに記憶してゐると答へてゐるのであるが (Raymond Turner, The Potsdam conference) モルゲンタウの書いた三つの記事を比較して見ると、同一の人が書いたものであり乍ら大分違つた所があり、昨日話した如くに記憶してゐるとは考へられないのである。即ち最初の World の分は一九一七年十月十四日で、他の二つの一九一八年の記事よりも以前であるので、より記憶が確實なるべき時に書いた筈であるのに、七月の前半とか、伯林とかなつてゐて、後のより記憶の薄らぐべき一九一八

年の分には、はつきり七月五日と書き、ポツダムとしてゐるのであつて、昨日の如く記憶してゐるとは考へられないことは勿論であり、且つモルゲンタウが之をワンゲンハイムの生前には發表せずして、死後になしたことは、彼が本國に於て發表した時に既に米獨が争つて居り、獨逸の罪科を米人に信せしめようとする宣傳の必要であつた時だつた事を考へると、それは餘程誇張した疑はしいものと考へられるのである。

次にガロニの話とモルゲンタウの話を比較して見ると、之は共にワンゲンハイムより聞いたのであり、その聞いた日がガロニは七月十五日でモルゲンタウは八月二十六日で、その間四十日間もたつてゐるので、いくらかの差は認めるとしても、同一の人が伯林に行つた時に、出あつた同一の事件の話であるから、内容にさう相違がある譯はないのである。然るにガロニの方は七月五日のポツダム會議なる語は一九一五年の發表には勿論なく、又一九一七年のにもなく、一九二一年の駐土佛蘭西大使ボンパールがポアンカレに送つた文書の中に初めて出て來るので、之はガロニが云つたものが大分疑はしいのである。この點に於てモルゲンタウの分も初めが大分曖昧であることから云つても、ワンゲンハイムが七日五日にポツダムにて會議を開いたと云つたとは思はれないのである。又會議の内容については、共に戰爭に決したことを云ふのであるが、ガロニにはその時に塞耳維への通牒が受けられないやうに伯林にて作ると云つたことになつて居り、一方モルゲンタウの方は獨逸皇帝が戰備を參會者に聞き、この日に

争に決したが、財政家の請を容れて、行動を二週間延期したといふので、全然違つた内容を持つてゐるのである。参加者についてもガロニの方は獨逸の主なる大使、工業家、財政家、鐵道關係者の會議があつたと丈あつて如何なる人が参加したか、その人名は出て居らず、モルゲンタウの方はチルピッツ、モルトケの名をそれに加へてゐるのである。かくの如くにワングェンハイムの話が違つてゐるのは、彼がポツダム會議なるものに出席しなかつた爲と考へられるのである。即ち自分で出席したものでなく、單に噂にきいたにすぎないので、かかる内容であつたらうと考へ、モルゲンタウ、ガロニに對しても、その時に任せ自分の考で語つたものと思はれるのである。獨逸皇帝によるとワングェンハイムはこの日に彼に逢つてゐないのである。(John Gaffney, *The Kaiser repudiates the Potsdam conference*) 然して獨逸皇帝はワングェンハイムがこのやうな會議のことを話したのは、伊太利、亞米利加を協商國側につけないやうに脅すために云つたので、彼が出席したといふのはその話の可能性を増すためであらうと見てゐるのであるが、之が正しいものであると考へられるのである。

この會議については協商國側のみならず、獨逸國內に於ても云つてゐるのである。一九一七年五月十日に獨逸國會の委員會の席上にて獨立社會民主黨の議員オスカー・ユーン博士は七月五日にポツダムに於て、フアルケンハイン、フリードリヒ大公、ヘツチェンドルフ出席の下に、御前會議が開かれたことを云つて居り、ついで同年七月十九日にハーゼは、『我々はそれに就いて塞耳維への埃匈國の最後

通牒を、露西亞に對する奥匈國の準備を、伯林に於て一九一四年の七月五日に戰爭についてなした會議を、一九一四年の重大なる時期のフアルケンハインとチルピッツの活動を忘れはしない。』(Kurt Jagow, der Potsdamer Kronrat, S. 33)と云つてゐる。之を根據としてタイムスは一九一七年七月二十八日の紙上に、前にあげた表題の下に、ハーゼの發表を云ひ、七月五日に會議の行はれたことは疑もなく、それには獨逸皇帝を始めとして、ベートマン・ホルヴェーク、チルピッツ、フアルケンハイン、スタム、フリードリヒ、ベルヒトールド、チイスサア、ヘツチェンドルフが出席し、ヤゴとモルトケは出席しなかつたと記してゐる。そうしてこの會議は十八日後の奥匈國の最後通牒の重なる點を論じて、それを決定し、然して露西亞はかやうな屈辱に従はないであらうから戰爭になると認め、多分動員の日もその時に決したのではなからうかとまで書いてゐるのである。

以上の他にはなほ獨逸人の書いたものでポツダム會議のあつたと云ふ證據としてあげられるものがある。リヒノフスキーの *Meine Londoner Mission 1912—1914* に、『ついで私は七月五日のポツダムに於ける重大なる會議に於て、維納の要求は總ての重なる人々の無條件の承諾をば得たことを確めた。然もそれに加へて露國との戰爭が成立しなければならなくなつても構はないとしたことを確めた。』(S. 31)とあり、リヒノフスキーも七月五日にポツダムに於て重大なる會議があつたことを聞いてゐることになる。又チルピッツの *Erinnerungen* に『彼はこの理由からして、既

に七月五日の間に宰相ベートマン・ホルヴェーク、陸軍大臣ファルケンハイン外務次官チンメルマンと軍事參議會の長官リンケルをポツダムによんだ。』(S. 209)と書いてあり、チルピッツは會議とは云はないが何かあつたことを云つてゐる。が然し是等の人達も決して出席したのではなく、噂をきいて書いてゐるのである。

以上の如くポツダム會議なるものは大概は噂より出て居り、出席したと稱するワングンハイムの話も同一人の話でありながら種々違つて居り、獨逸皇帝の云ふ如くに、話の確實味を増すために出席したと云ふのであらうと考へられるので確な話と云ふのは一つもないのである。なほ是等の種々に云はれてゐる會議の出席者を調べて見ると皆自分で出席したのではないので勝手なことを云つてゐるのが判るのである。即ち之を表示すると、(次頁上圖の如く)となり、同じことを云つてゐるのはなく、中には全然出席出来ぬと考へる人まであげてゐるのである。

出席者の一人としてあげられてゐるベートマン・ホルヴェークの *Betrachtungen zum Weltkrieg* に『七月五日の午後に皇帝は私と當時賜暇中の外相ヤゴの代理をしてゐた外務次官チンメルマンにポツダムの新王宮の庭であつた。その時他には誰も居なかつた。』(S. 135)とある。之に對して原勝郎博士は他に誰も居なかつたと云ふのは敘して盡さざるの感があると云つて居り、若しこのベートマン・ホルヴェークの敘述をあつてゐるとしても、この二人が逢つた他に武官丈の會議があつたであらうと云つてゐる。

Berlin に於ける噂	陸軍関係者																
	Kaiser	Bethmann	Friedrich	Zimmermann	Falkenhayn	Moltke	Tirpitz	Hötzendorf	V. Stumm	Bertrab	Lyncker	Wangenheim	獨逸の大使 實業家	Szögény	Tisza	Berchthold	
Nieuwe Rotterdamische Courant	○	○		○													
Temps	○																
Lewis Einstein	○				Generals								○	○			
World	○					○	○					○	○				
The world work	○					○	○					○	○				
Morgenthau's story	○					Die Häupter des generalstabund der Marins						○	○				
Oskar Cohn			○		○			○									
Times	○	○	○		○		○	○	○						○		○
Tirpitz	○	○		○	○						○						
世界大戦史	○	○	○		○					○	○						

(世界大戦史、三四頁)之については待從武官の日記がある。それには七月五日、六日に獨逸皇帝があつた人の名が出てゐるのである。その日記の七月五日の項には、『七時起床、曇小雨、八時禮拜、それから朝飯

十時半から十二時迄アダルベルト陛下とサンスーシーのオレンヂ園と城と庭を散歩する。十二時に皇帝はシーベル教授の繪を見る。一時少し前に皇帝は埃匈國の使節に逢ふ。彼は皇帝フランツ・ヨーゼフの宸翰を渡す。使節は晝飯に招待される。三時から四時まで休養。五時に皇帝は陸軍大臣と軍事參議會の長官に逢ふ。六時には宰相と外務次官に逢ひ、それから海軍々令部の長官代理に逢ふ。八時に夕食、羅馬尼のカロル公。ペルチカレ將軍、宮内大臣ライヒスバッハ男爵夫妻を招待する。十時十五分就寢。(Kurt Jagow, Der potsdamer Kronrat. S. 11)とあり、更に六日の所には『六時十五分起床、曇。八時三十分朝飯、九時十五分に特別列車にてウィルト・バルク驛からキールへ向け出發した。出發の前に皇帝は陸軍參謀本部長官代理ペルトラーブ將軍と海軍砲兵局長カペル提督を報告によんだ。』とある。

この五日、六日の日記には前の表にあげてある人々の中大分は獨逸皇帝にポツダムで逢つて居り、原博士の云はれる如くに多勢の人がこの時ポツダムに居たと云はれるのであるが、又ペートマン・ホルヴェークの *Betrachtungen zum Weltkrieg* の記事にも、又ペルトラーブの『明に海軍士官と同様の目的をもつて直接に皇帝と密談をなし、協議の後、直にひきさがつた。皇帝は私が去つてしまふと北海旅行への自動車に乗つた。』(Karl Kautsky, *Die Deutsche Dokumente*, Band. I. S. XV)と云ふ報告及びカペルの『私は庭にて北海旅行の準備の出來た獨逸皇帝に逢つた。皇帝は私としばらくあつちこつち歩いた。』(Ibid. S. XIV)と云ふ報告にも一致するのであり、穩當であらうと考へられる。それ故にタイムスの云

ふが如きベルヒトルドまでも出席したと云ふやうな大きな會議は勿論なく、又ワングンハイムの傳へる如き主なる大使、實業家の參加した會議も——カウツキー文書を調べるとその第十四、第十六、第十九、第二十號よりチルスキー(駐澳)リヒノフスキー(駐英)グリージンゲル(駐塞)ワルドブルグ(駐羅)がポツダムに居なかつたことは明であり、然して獨逸の主なる實業家クルツプも又バリンも居なかつた。——あつたとは考へられないのである。

ついで第二の問題としてこの七月五日に獨逸皇帝が宰相或は陸軍大臣と會見した時に、戦争をなすに決したか、どうかと云ふ問題がある。七月五日に獨逸が戦争に決したと云ふのはワングンハイムより出た話によるので、ガロニの聞いた方には、一九一五年六月二十日のルイズ・アインシュタインの日記に『戦争は避けがたいものと決した。塞耳維の受諾し難いやうな最後通牒が送られるであらう。そうして四十八時間後には戦争が宣言されるであらう。』とワングンハイムは云つたとあり、ガロニの話は大體このやうなものであつて、大公の殺害を口實として塞耳維の受諾することの出来ない最後通牒をあたへ、戦争を避けがたいものとしようとしたと云ふのである、一方モルゲンタウの方は自身で書いた一九一七年十月十四日の *World* 紙上に、ワングンハイムはトルコのことをきかれ、軍人側實業家側は共に戦争の準備が出来てゐるかときかれたと書いてあり、他の二つもほぼ同じである。

然して同じワングンハイムの話もかくの如く違つてゐるのであるが、この會議が目的としたと稱せら

れる戦争を避け難いものとする爲に塞耳維に送る通牒を作つたとか、戦争を豫期して戦争の準備をきいたと云ふやうなことは、共に七月五日に獨逸が戦争を決意したと云ふ理由になり得るのである。

之について七月五日六日にポツダムに居た人達の書いたものを調べると、先づ第一に、獨逸皇帝はその *Ereignisse und Gestalten* に『私は出發の前に、當然、例の如くに、個々の大臣に接見し、彼等の管掌事務の狀況を聞いた。そこには大臣の會議も開かれず、個々の會談に於ても戦争の準備についての話はなかつた。』(S. 210)と戦争の準備について否定して居り、宰相ベートマン・ホルヴェークは、その著 *Betrachtungen zum Weltkrieg* に『その内容について私が報告した後に、獨逸皇帝は二重王國に於て汎塞耳維主義の宣傳によつて齎らされた事態の重大さに関して欺くことは出来ないと言つた。然しセラエヴォの犯罪に關して如何になすべきか、我々の同盟に教へるのは我々の仕事ではない。それは塊匈國自身で決すべきである。』(S. 135)と云ひ、その時一緒に居たチンメルマンも『皇帝は塞耳維のことは彼等自身の方法で塊匈國が定めるべきことで、それは我々の仕事ではないと云はれた。この意見を塊匈國の使節にも、駐塊獨逸大使チルスキーにも出した。』(Official German documents relating to the world war. Vol. I. P. 23)と云つて居り、獨逸皇帝の *marginal note* に『塞耳維との事ははつきりさせなければならぬ。そうしてそれはすぐになす必要がある。』(Karl Kautsky, *Deutschen Dokumente*. Band I. S. 11)と書いてあり、更にホヨス伯が獨逸が塊匈國を煽動しなくて、ただ『塊匈國の立場を良くするよう

何れとも自決せよ』と云はれたのみで、寧ろ自分等の期待が裏切られたと云つて憾んでゐることから考へても、(Alexander Hoyos, Russian chief culprit precipitation of the world war) 通牒を作つたのは奥匈國自身であつて、然して早くせよと書いてゐる位で、延期されたのは經濟界の人のためでなく、奥匈國の都合によつたものと考へられる。

更に武官の方を調べると、陸軍大臣ファルケンハインの報告には『一九一四年七月五日の午後皇帝は私を新王宮によんだ。……皇帝は私に有名なフランツ・ヨーゼフの手紙をよんで聞かした。……そうして奥匈國が汎塞耳維主義の宣傳を終にするために斷乎たる決心をするのは重大なる結果が起るであらうと云ひ、そうして最後に私に軍隊はすべての出來事に對し準備が出來てゐるかときいた。私は確信をもつて簡單に無條件に出來てゐると答へ、そうして私の方としては他の準備をなすべきかとのみきいた。皇帝は簡單にさうせずともよいと答へ、私を退去させた。』(Official German documents relating to the world war. Vol. I. P. 64) とあり、七月六日に伺候したカペルの報告には『彼は大なる戦争の複雑を考へてゐない。露西亞皇帝は、彼の意見によると大公殺害者の側につかないであらう。特に露西亞と佛蘭西は戦争の用意が出來てゐない。』(Karl Kautsky, Die deutschen Dokumente. Band I. S. XIV) とあり、同じく七月六日に伺候したペルトラープの報告 (Ibid. S. XIV) 又ワルデルゼー、ツェンカーの報告にも同じやうに出て居り、獨逸皇帝は奥匈國の使節からきかれた時、露西亞が戦争に加はらないことを信

じて奥匈國に援助を約したのである。それで勿論戦争になるとは考へないので戦争の準備を命令しなかつたのである。なほこの援助を約したことをもつて非難されるのであるが三國同盟の一員として獨逸が奥匈國に援助を約するのは當然であり、怪しむにたらず、又この答により獨逸が戦争に決したとは考へられないのである。

以上の如くに、七月五日、六日にポツダムに居つたものは總て戦争に決したことを否定して居り、戦争の準備についてきかれたのはフルケンハインだけであつて、之とても戦争に決したならば更に命令があるべきであるのに、それをきいた時皇帝は別にその要なしとしてゐる。そうして又戦争に決したならばすぐ報告を受けるべきヤゴーにもそれがなかつたことによつても戦争に決したのでないことは明である。(Official German documents relating to the war. Vol. I. P. 28) 更に又この會議のあつたと云はれる七月五日には外相ヤゴーは新婚旅行に出掛けて瑞西に遊んで居り、參謀總長モルトケはカールスバードに静養中であり、チルピッツはクラスプに居り、皆ポツダムに居なかつたのである。是等の人々は獨逸が戦争に決する時その會議に缺くべからざる人達であり、この人達なしにて七月五日に戦争に決したとは考へられないのである。

奥匈國の使節が来て、獨逸皇帝に逢つたのが七月五日で、獨逸皇帝は七月六日には北海旅行に出掛けるので、その前に報告させるために海軍陸軍關係者とか宰相を呼んだのが一緒にになり、ポツダム會議な

るものの噂となり、宣傳に使はれるやうになり、いよいよ大きく傳はつたのであるが、決して實在のものとは考へられなないのである。

著 者 書

- H. H. Asquith, The genesis of the war, 1923
H. E. Barnes, The genesis of the world war 1927.
Bethmann-Hollweg, Betrachtungen Zum Weltkrieg Band. I. 1919.
Carnegie Endowment, Official german documents relating to the world war, 1923.
Cooke and Stickney, Readings in European international relations, 1931.
John Gaffney, The Kaiser repudiates the potsdam conference "Legend"
Alexander Hoyos, Russian chief culprit in precipitation of the world war
Kurt Jagow, Der potsdamer Kronrat, 1928.
Karl Kautsky, Die deutschen Documente zum Kriegsausbruch Band I, 1919.
Lichnowsky, Meine Londoner Mission 1912—1914
Henry Morgenthau, Ambassador Morgenthau's Story, 1919.
Raymond Turner, The potsdam conference.
原 勝 郎 世界大戦史
齋藤 斐章 世界大戦の責任を負ふべきは果して獨逸國なるか